

2018 年度入学式 学長式辞

今日の良き日、ここに埼玉大学入学式を迎えられた 1,646 名の新入生の皆さん、入学おめでとうございます。埼玉大学の役員と教員 450 名、職員 220 名、そして 7,000 名の在学学生を代表し、学長として、皆さんの入学を心から歓迎します。また、式典にご参列下さいましたご家族の皆様方に対しましても、深く敬意と祝意を表したく思います。

今朝、埼玉大学キャンパスでは、皆さんを歓迎するかのよう、木々の新しい芽や若葉のもたらす柔らかな新緑が眩しく輝いていました。私は 47 年前に、当時の理工学部に入学生、大学生としての 4 年を埼玉大学で過ごしました。移転して間もなかったキャンパスはやや殺風景の感がありましたが、今や、四季折々に美しく緑豊かなキャンパスになっています。これは、私の恩師でもあり、第 5 代学長を務められた岡本舜三先生が、40 年前に植えられた木々が育ってできたものです。時の流れという時間軸の重みと、初動という時間軸の原点の大切さを教えてください。皆さんは今、それぞれに決意も新たに大学での生活を想い描いていることと思います。今日の入学という節目、大学生としての初動を大切に、それを原点とした新たな時間軸に沿って歩みを進め、大きく成長して下さい。

埼玉大学の掲げるビジョンは「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉～多様性と融合の具現化」。文系、理系、教員養成系の多様な学問が、日本人、外国人、社会人の多様な学生と教職員が 1 キャンパスに集う埼玉大学。大学として普遍的な知の府としての基盤強化と、首都圏埼玉に根ざした埼玉大学の個性化を 2 軸として機能強化を進め、一層輝きを増します。

第 1 の軸は、大学の主たる使命が知の創造と継承であることをしっかり据えて、これまでに進めてきた、研究力と人材育成力の強化という知の府としての基盤強化です。また、第 2 の軸は、地域活性中核拠点としての役割を積極的に担うことを掲げ、産学官連携による地域課題の解決と地域ニーズに応じた人材育成という埼玉大学としての個性化です。埼玉大学は多様性を尊重しつつシナジーをもたらす「多様性と融合の具現化」を進めます。

この埼玉大学も、2019 年に創立 70 周年を迎えます。そして 70 周年のキャッチフレーズを「つなげよう未来へ」としました。「あらゆる立場の人をつなぐ架け橋であることが埼玉大学の魅力。例えば、留学生と日本人学生、同窓生と現役学生、地域の人と埼大生がつながっています。70 年間の人と人の心をつなぐ役割を未来へつないでいってほしい。」とは作成者である教養学部 4 年生の上村真由さんの言葉。学長としてとても嬉しい学生からのメッセージです。新埼大生となった皆さんには、主役の現役学生として、日本人学生、留学生の区別なくつながり、同窓生や地域の人びとも積極的につながって、埼玉大学の歴史をさらにつないでいって下さい。

私が留学生とのつながりを強く意識したのは、1990 年からの 2 年間、JICA の派遣専門家としてタイ・バンコクのアジア工科大学院で過ごした時で、アジア各国からの優秀な大学院生の教育・研究指導に携わりました。帰国後に埼玉大学で環境科学・社会基盤国際プログラムを始め、学長になるまで、留学生、日本人学生と一緒に橋の構造に関する研究を楽しんでいます。大学におけるグローバル化は、単に英語での授業、外国人留学生の受け入れや日本人学生の海外派遣を増やすことではありません。世界と日本、世界とさいたまの関わりを理解できる能力や感覚が身につくような環境づくりが必要です。学長として、埼玉大学ならではの多文化キャンパスを実現し、皆さんにはその環境を享受して頂きたいと思っています。

皆さんが同窓生ともつながるべく、このところの埼玉大学卒業生の活躍も紹介しましょう。この3年で実に学術、文化、芸術の各分野にて同窓生の活躍が認められました。「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉～多様性と融合の具現化」を掲げる埼玉大学の本領発揮です。彼らはみな、後輩に向けたメッセージの中で、出会いの大切さを教えてくれます。

一人目は、2015年ノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章先生。埼玉大学理学部を1981年に卒業して東京大学大学院に進学、現在、東京大学宇宙線研究所の所長を務めています。埼玉大学にて受賞記念講演を行って頂いた際、梶田先生は、「恐らく、本当に物理学の研究を志したのは大学院生の時であり、ものすごく幸運なことに良い師、仲間、研究プロジェクトに恵まれました。」と語っています。梶田先生の「出会い」にはご自身、研究者人生の大きな転機となったとする、観測データとの出会いも含まれます。スーパーカミオカンデでの観測データに、計算値とのずれが生じていることに気付き、非常に重要に感じてこのずれを解明する研究に専念、ニュートリノ質量の発見につながったとのこと。そして、こう続けています。「大学は学問の入口。いつ人生を決めるような、大切な出会いがあるか分かりません。広く目と心を開いて、大切なものに出会ったときのための準備をして下さい。」

二人目は、妖怪研究の業績で2016年文化功労者に選ばれた小松和彦先生。1970年、埼玉大学教養学部の卒業です。在学中に文化人類学という学問と良き師に衝撃的に出会い、埼玉大学時代の後半には、埼玉県両神村でキツネつきや神隠しのエピソードに関するフィールドワークを行って研究者の道を歩み、現在は国際日本文化研究センターの所長を務めています。埼玉大学で講演頂いた際の演題が「謎解きという快樂に魅せられて -私の学問人生-」。現役学生に対して「研究はつらくても、同時に楽しい謎解き。まずは、楽しむことを一番の柱にして頑張ってください。」と語っていたことが印象的でした。そして「埼玉大学に来なかったら今の研究はしていなかったかも知れません。チャンスを見つけ自分の道を切り開き、社会で活躍してほしい。」と、出会いの重要性にも言及しています。

三人目は、雪景色の絵で著名な洋画家、根岸右司先生です。2016年度日本芸術院賞を受賞されるとともに、2017年末には権威ある日本芸術院の会員に推挙されました。埼玉大学教育学部を1961年に卒業、在学中に生涯の師となる渡邊武夫先生に出会い、埼玉県立浦和高校などで美術の先生をやりつつ画家として活躍しています。因みに私は、時期はずれるものの浦和高校時代に美術部でしたので、根岸先生とは埼玉大学以外でもつながり、人のつながりの妙を痛感しています。根岸先生には、本日の入学式で特別講演をお願いしていますので、皆さんにも、先輩である根岸先生と直接つながってほしく思います。

もう少し「つなぐ」、「つながる」ということを考えてみましょう。霊長類研究の第一人者で、京都大学総長の山極寿一先生が次のように話しています（天声人語、朝日新聞、2015年1月5日）。「ばらばらで食べるサルに対し、人間は食物を仲間のところへ運んで一緒に食べる。人間は共感力を発達させ、家族を営み、さらに150人程度の共同体をつくった。そうした歩みは、人間が言葉を獲得する以前のコミュニケーションがもたらした。だから、現在でも言葉以前の交流が大切となる。例えば、触覚。握手し、抱き合うことが人間関係に好影響を与える。生身の身体を使って人とつなぐ。」さらに山極先生は、哲学者で京都市立芸術大学学長の鷺田清一先生との対談の中でも（「都市と野生の思考」、インターナショナル新書013、集英社、2017年）、何かに出会ったときに「これだ！」と閃くことのできる直感力の大切さに関連して、ネット社会の危うさを述べています。例えば、自分が何か見つけたとしても、

それを自分で判断するのではなく、常時ネットにつながっている仲間に報告し、共有する。そんなことをしていたら、自分の体験としての直感力を鍛えることなどできるはずがないと主張します。勿論、人間の文化は、共有や同調などのつながりの中に芽があること、インターネットにより、もともと共有できなかったものが共有できるようになり、新しい社会関係が生まれたことの意義は十分に認めた上で、本来は生ものだった社会関係がバーチャルなものになり始めたことに危機を感じているのです。IoT 社会において SNS 等を上手く使いこなしている皆さんにも、是非、考えてみてほしいことの一つです。

チンパンジーの研究で著名な京都大学高等研究院特別教授の松沢哲郎先生も、人間らしさとしての心と絆、つながりについて、小論「想像するちから -チンパンジーが教えてくれた人間の心-」（學士會会報、第 913 号、2015 年）の中で述べています。心については、教育を例として、チンパンジーは親が手本を示し、子供が自発的に真似るという「教えない教育、見習う学習」であるのに対し、人間は子供の手を取って教え、子供に頷き、微笑み、褒め、見守り、認めるという「教え、認める教育」である。子供には認められたいという強い欲求があるところに人間らしさがあると説明します。また絆については、チンパンジーと違い、人間の親子だけが離れた状態で顔を合わせ、微笑み、見つめ合う。夜泣きも人間の赤ちゃんだけで、離れているから声に出してやり取りする。幼稚園や学校の先生も含め、お父さんズ、お母さんズという複数の大人が共同で育てていることも人間らしさとのことです。心のつながり、人のつながりの大切さを教えてくれています。

ところで、松沢先生は、人間とチンパンジーとの一番の違いは「人間は想像するちからを持つ」ことであり、人間らしさである心も絆もこの想像するちからに由来していると述べています。「チンパンジーは「今ここの世界」を生きているので、絶望しないし、明日のことで悩まない。それに対して、人間は「今ここの世界」だけではなく遠く離れた過去や未来に思いを馳せたり、地球の裏側の人に思いを寄せたりする。そんな想像するちからを持つからこそ、簡単に絶望するし、逆にどんな難しい状況にあっても、明日を信じて希望を持つことができる。それが人間なのだと分かった。」と松沢先生は言います。この想像力を活用することこそ、知識社会に生きる我々、人間の務めではないでしょうか？

想像力については、サイエンス作家の竹内薫博士も、著書「文系のための理数センス養成講座」（新潮新書 705、新潮社、2017 年）の中で論じています。彼は、科学の限界は、科学が解決すべき課題の難解さではなく、人間の「想像力の限界」なのだという考えがあると言います。そして、Albert Einstein の名言 "Imagination is more important than knowledge. Knowledge is limited. Imagination encircles the world." 「知識よりも想像力が重要だ。知識には限界がある。想像力は世界を包み込む。」を引用してこう続けます。「科学 science という言葉は、知識という意味のラテン語「スキエンティア」から来ているが、Einstein は、科学の知識面よりも想像力、着想や考え方の多様性を重視していた。実際、科学は「想像する」ことから始まっている。「こうではないだろうか？」と想像できなければ、実験しようとか、観察してみようとか、そもそも考えない。想像力がなければ、科学という営みそのものがなくなり、当然、実験や観察や考察の結果が科学知識として蓄えられることもない。」

そして、文理融合にも言及します。理数センスとは、単に複雑な数字を手早く扱えることではなく、日常の中でその数字がどう使われるのか、相手にどう受け止められるのか、こうしたことまできちんと思考できることでもあるはず。科学により算出された数字をきちんと

理解した上で、情緒や感性と具体化の文系センスにより、いわば再計算するような文理融合のセンスが求められるとしています。文系、理系を対立させる傾向の強いこれまでの日本にあって、IoT や AI がもたらす社会変革の予想が難しい今、大学生となった皆さんにも、「文理融合」という言葉が一つの重要な keyword になることを理解してほしいと思います。

さらに、竹内博士は、「科学だって疑え」ということを力説します。そもそも疑うこと自体が科学の重要な要素で、科学は検証を大事にするという意味で、科学は疑うことも疑われることも避けない。科学を信じるのではなく知ることが大事。知るためには正しく思考することが重要で、正しく思考するということはきちんと正當に疑うことでもあると説明します。そして、次のようにまとめます。「科学は、放っておけばますますブラックボックス化するのだから、その本質や最新の動向には、専門家以外の人たちも目を配る必要がある。科学は、専門家に任せっぱなしで良いものではなく、社会の側にもこれを疑う眼が必要。その意味でも、日本の発展のためには理系・文系の区別を今こそ捨てる時がきている。」

新しい科学技術は、これまでの専門の枠を超え、新しい手法で対象を総合的にとらえようとしています。科学が自然現象だけでなく、人間や社会の歴史や活動を扱う分野にも対象を広げているといえます。したがって、「自分は文系だから科学は関係ないとか、自分は理系だから文学は知らない、という態度は誤っています。未来の可能性を自ら狭くしているからです。」とする竹内博士の主張は大いに共感できます。新埼玉大生の皆さん、多様な学問が共存し融合する埼玉大学の環境を十分に活用してみてもはどうでしょうか。

今の知識社会にあって、幅広い知識だけでなく、柔軟な思考力に基づく判断が一層重要となり、知識は課題を解決しようとする思考と行動に結びついた時に初めて意味を持ちます。つまり、ゲーテの言葉のとおり、**"Knowing is not enough; we must apply. Willing is not enough; we must do."**「知るだけでは不十分、知の活用が必要。意思だけでは不十分、実行が必要である。」のです。そして、ゲーテは思考に関連してもう一つ、言葉を残しています。それは、**"Thinking is more interesting than knowing, but less interesting than looking."**「考える事は知ることよりおもしろい。しかし、見ることには及ばない。」ただ、ゲーテは同時に、**"We only see what we know."**「われわれは知っている物しか目に入らない。」とも言っており、見ることの難しさも指摘しています。見えるものをとらえる時、自分のフィルターがかかり、目の前に見えているのに見ていない、自分が見たいものだけを見てしまいます。

さあ、新たな時間軸の始まりです。大学での生活は皆さんの長い人生の中でとても重要な時期、しかも新たな時間軸原点からの限られた最初の4年間です。埼玉大学において、学問や師、良き仲間と出会い、つながるとともに、自分の専門性をしっかり据えた上で専門以外にも目を配って下さい。そして、知ること、考えること、見ること、想像すること、疑うこと、判断すること、実行すること、といったワクワクする行為を十二分に楽しんで下さい。最後に、皆さんが充実した大学生活を送り、成長して行かれることを心から祈念して、私の式辞とします。

平成 30 年 4 月 4 日

埼玉大学長 山口宏樹